

機関番号：12701

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520067

研究課題名（和文） J. S. ミルにおける自由と正義と宗教—現代的課題の先駆—

研究課題名（英文） J.S.Mill's Ideas of Liberty, Justice and Religion: An Initial
Approache of Present Day Issues

研究代表者

泉谷 周三郎 (IZUMIYA SHUSABURO)

横浜国立大学・教育人間科学部・名誉教授

研究者番号：60015394

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代の大衆社会の原型が形成された19世紀英国・ヴィクトリア時代の知的文化的環境の特質を、当時の社会的な諸問題を念頭に置きながら代表的思想家J.S.ミルとその周辺の諸家の知的営為を中心に検討した。具体的には、自由、正義、宗教を選び、人文・社会科学の2つの領域から考察をぶつけ合った。それにより、英国国教会系知識人、福音主義やユニテリアン、ロマン主義や功利主義の相互関係を、当時の社会改良運動に目配りしつつ従来にない形で明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This joint research investigated the intellectual atmosphere of 19th century Victorian era where the proto type of modern mass society was made. It targeted the intellectual activities of J.S.Mill, his followers and antagonists together with viewing their contemporary social problems. Practically, the research selected the themes of liberty, justice and religion, and had a chance of disciplinary collision between humanities and social sciences. Consequently, it revealed the relationships between Anglican intellectuals and non-conformists such as evangelicals or Unitarians, Romantics and utilitarians by focusing on the movement of social reform those days.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：社会思想史・正義

1. 研究開始当初の背景

(1) 思想史研究としてのミル研究は、哲学・倫理学における『功利主義論』、経済学における『経済学原理』に対応させれば、何より

も『自由論』(On Liberty, 1859)を機軸に進められてきた。古くはI. バーリンの積極的自由と消極的自由の区分や、新しくはリベタリアニズム対コミュニタリアニズムの論争

があるが、いずれも基本的には『自由論』で提示された「危害原理」[Harm Principle]を巡る議論が前提となっている。また、『自由論』での自由概念は古典派経済学、現代の新古典派経済学に共通する経済的自由主義と「経済人」仮説を基礎づけてもいる。つまりこれらは、確かに現在では古典的功利主義の思想家に分類されるとはいえ(Fred Rosen, *Classical Utilitarianism from Hume to Mill*, London: Routledge, 2003)、今なおミルの提起が現代的意義を失っていない証拠である。ロールズ『正義論』の主たる批判の対象がベンサム・ミル・シジウィックに系譜づけられる功利主義であったことにも、それが示されている。

(2) 本研究の申請時において、多くの権威主義的国家における政治的自由の侵害、現実の政治過程での法規範の遵守と正義の蹂躪、経済過程での分配的正義の破綻、世界各地での宗教紛争の過激化などを、解決すべき焦眉の現実課題として見ることができたし、現在もその事態に変わりはない。実は、ミルは19世紀ヴィクトリア時代の社会状況の中で、個人の自由を巡る問題と同時に、正義と宗教の問題についても独自の探求と提案を行っている。事実として、『自由論』などと平行して書かれた正義論('On Justice')草稿が『功利主義論』に合体させられた一方で、最晩年に『宗教三論』(*Three Essays on Religion*, 1874)として人類教[the Religion of Humanity]ないし“希望の宗教”なる新宗教の提案をしている。本研究課題では、こうした事情に鑑みて、自由の問題を前提しつつ、内外を問わず従来必ずしも十分に検討されてこなかった、ミルにおける正義、関心が極めて限られてきたミルにおける宗教の問題を、ヴィクトリア時代の文化・思想状況、人文的側面と社会科学的側面などに配慮した

統一的な視点から検討しようというものであった。

(3) また、申請時での個別の研究動向を見ると、自由については、研究代表者・泉谷が翻訳にかかわったジョン・グレイ『ミル『自由論』再読』(木鐸社、2001年)などを典型に、内外ともに関心が常に継続している。正義に関しては、『功利主義論』での議論に埋め込まれる形で必ずしもミル正義論を独自にとりあげるものは多くなく、研究代表者・泉谷は、「J. S. ミルの正義論について」(『横浜国大人文紀要』第1類24輯、1978年)の先駆的研究および「J. S. ミルの正義論」(『イギリス哲学研究』第27号、2004年)はその数少ない取り組みであった。宗教については、現代における最重要課題であるにもかかわらず、ミルとの関連では極めて関心が低く、英米圏に置いても、主題的な研究成果はLinda C. Raeder, *John Stuart Mill and the Religion of Humanity* (Columbia and London: University of Missouri Press, 2002)、Allan P. F. Sell, *Mill on God: The Pervasiveness and Elusiveness of Mill's Religious Thought*, Aldershot: Ashgate, 2004)の他には見るべきものはない。国内においては、小泉仰のミル研究の一環として言及されている(小泉仰『ミルの世界』講談社、1988年;『J. S. ミル』研究社、1997年)他は、杉原四郎他編『ミル研究』(御茶ノ水書房、1992年)所収の柏経學「ミルの宗教三論」、近くは長谷川悦宏「人類教の二つの解釈」(『社会思想史研究』29号、2005年)、および、研究分担者・有江大介「J. S. ミルの宗教論——自然・人類教・“希望の宗教”——」(『横浜国際社会科学研究所』、12巻6号、2008年2月)など限られており、また現代的課題への関心は乏しいものであった。

(4) 本研究課題では、加えて、研究代表者・

泉谷の「J.S.ミルにおける『功利の原理』の証明について」(『倫理学研究』19号、東京教育大学倫理学会、1971年)以来35年を越えるミル研究の集大成として、同一研究機関に所属する研究分担者・有江との共同作業の下に、自由、正義、宗教を通底するミルの人間論、社会観をあぶり出すことを通じて、それと現代社会の病巣との関連においてミルの現代的意義に迫ろうというものである。もちろん、この探求が同時に、『自由論』出版150年を迎える内外のミル研究に新たな貢献をするものであると考えるし、成果の出版計画を持っているのも当然のことである。

2. 研究の目的

(1) 3年の研究期間内に明らかにすることは、第一に、ミル『自由論』研究の現在における到達段階を評価することであった。その際に念頭におくのは、*Liberalism as an Ideology, A New Liberalism An Ideology of Social Reform* (Oxford University Press, 1978)から *The Meaning of Ideology: Cross Disciplinary Perspectives* (Routledge, 2007)に至るまで、自由ないし自由主義を一貫して一つのイデオロギー、ないし概念〔concept〕ととらえ西欧世界での言説の内容の変化に注目するマイケル・フリーデンの方法である。英米圏では大きな影響力を持ったフリーデンを我が国ではそれを無批判に受容する傾向が強いが、たとえばミャンマーなどの権威主義的な発展途上国の現実政治の中では、自由は実体的な内容をもったものとして、いわば獲得の物的対象なのである。こうした、現実の問題の視点から現代の自由や自由主義の言説の特質を明らかにすることを目標とした。

(2) 第二の目的は、ミル正義論、ないし功利主義の正義論への批判に対して適切な反批判の視座を明らかにすることであった。自由

の問題と同じく、我が国ではロールズ『正義論』の圧倒的な影響力の下、そこで展開された古典的功利主義批判もさしたる反省なく受容されている傾向が強い。研究代表者・泉谷はすでに前掲の2004年論文において、それら批判の一面生を指摘しているが、ここでも、ベンサム以来の功利主義が持っている幸福や自由の現実化の契機を生かす視点から、批判する側の議論のリアリティの欠落を指摘しつつ、適切な功利主義正義論のプロトタイプを提示することを目指そうとした。

(3) 第三の目的は、我が国でのミル研究ではもっとも遅れているミルの宗教論をとりあげ、「人類教」などなぜミルがあえて、キリスト教世界の中で新たな宗教を提案したのかを明らかにするとともに、現代世界での深刻な宗教対立とそれによる紛争状況に対して、ミルの提起が何か有益な対処のための視座を提供できるか否かを示そうとした。

3. 研究の方法

(1) この研究計画では、研究代表者と研究分担者とがそれぞれの研究を基礎に、恒常的な討論、および適宜開催予定の研究集会などでの研究サーヴェイや議論を通じて、当該研究課題についての研究を蓄積、整理し、3年間の研究計画期間中の成果を論文集として発表することを具体的計画の中核とした。

(2) その方法的前提として、研究代表者、分担者の共同作業により、研究動向のサーヴェイや実現すべき論文集の中核となる部分の構想を練り上げることに重点を置いた。具体的には、現在の段階でのJ. S. ミルの研究状況を確認するとともに、研究上の弱点と思われる宗教論と正義論を中心に、必要な文献・資料の所蔵場所での調査・閲覧・複写を行った。その際に参照・検討すべき文献として、現在の哲学・倫理学でのミル研究の方向を示しているというJohn Skorupski編の

The Cambridge Companion to Mill (Cambridge University Press, 1998)、および彼の最新作 *Why Read Mill Today?* (Routledge, 2006)、自由論では K.C.O' Rourke, *J. S. Mill and Freedom of Expression*, (Routledge: 2001), 正義論では Roger Crisp, *Mill on Utilitarianism* (Routledge, 1997) を念頭に置いた。宗教論では、上掲の Raeder(2002)と Sell(2002)の2著を主要な検討対象とした。

(3) 次に、この問題を思想史研究として行うに当たって、適宜、19世紀ブリテン思想史に関する専門知識の提供を国内の研究者、必要ならば国外からの招聘研究者から研究集会の報告の形で受けることとした。その際、正義論に関しては、ベンサム、シジウィックの功利主義、ロールズ『正義論』に代表される現代の功利主義批判を、宗教論については、ミルが『宗教三論』執筆の際に念頭に置いたヒュームの自然神学・デザイン論証批判、ペイリーの『自然神学』、ベンサム／グロウトの『自然宗教の分析』等を念頭に置いた。併せて、ミル、ベンサムを中心とした功利主義がどのように東アジア（日中韓）に波及したのかについても新たに検討課題に含めた。また、当該研究課題の位置づけとその進捗状況を確認する意味を含めて、研究分担者が、2008年9月に開催された米国・カルフォルニア大学バークレイ校で開催された国際功利主義学会（ISUS）にてミル功利主義の特質とアジア的価値観との関連に関する報告を行った。

(4) 最後に、次項の「研究成果」に詳述するが、前項に記した本研究の成果発表を念頭に置いた国内研究集会を研究期間の3年間に8回12報告、国際セミナーを2回（横浜、ソウル）開催した。国内研究集会は、成果刊行のための原稿検討会として研究期間終了

後の現在も継続して開催している。これらが研究代表者、研究分担者による本研究課題の遂行に大きく資するものとなったことを指摘しておきたい。

4. 研究成果

(1) 第一に、上述した、研究成果の刊行を念頭に置いた研究集会、原稿検討会を以下の内容で開催した。これらの内容自体が研究成果の一端を示している。

*2008年7月5日（土）第1回研究集会（横浜ランドマークタワー・サテライト）

有江大介（横浜国立大学）研究計画の概要と提案、泉谷周三郎（横浜国立大学）ヴィクトリア時代研究の現状：文学・宗教を中心に

*2008年8月22日（金）第2回研究集会（横浜ランドマークタワー・サテライト）

山下重一（國學院大学）カーライルとミルの黒人問題論

*2008年10月25日（土）第3回研究集会（横浜ランドマークタワー・サテライト）

荻野昌利（南山大学）イギリス「教養主義」の生成と展開——ミル、ニューマン、アーノルド

*2009年1月31日（土）第4回研究集会（横浜ランドマークタワー・サテライト）

大久保正健（杉野服飾大学）ジョン・ステュアート・ミルの認識論

*2009年7月18日（土）第5回研究集会（横浜ランドマークタワー・サテライト）

小泉仰（慶應義塾大学）J.S.ミルとキリスト教

*2010年8月1日（日）第6回研究集会（横浜ランドマークタワー・サテライト）

船木恵子（武蔵大学）Martineau Society（7/16-18）での報告について、矢島杜夫（國學院大学）J.S.ミルとS.スマイルズ

*2010年11月27日（土）第7回研究集会（横浜ランドマークタワー・サテライト）

船木恵子（武蔵大学） ヴィクトリア時代における実証主義の受容：ハリエット・マーティノーウを中心に、前原直子（中央大学） J.S. ミルの経済思想と幸福論、有江大介（横浜国立大学） J. H. ニューマンの知識論・大学論： J. S. ミル

*2011年2月19日（土）第8回研究集会（學士會館）

水野俊誠（慶應義塾大学） J.S. ミルとヴィクトリア時代の思潮：徳と幸福の関係をめぐって、山下重一（國學院大学） 中村敬宇『自由論』翻訳の諸問題：主としてキリスト教受容にかかわって

(2) 成果発表の一環としての国際学会、国際セミナー、国際ワークショップを以下のように開催し、また参加した。

*2008年9月10日（水）－15日（月）第10回国際功利主義学会サンフランシスコ大会報告：有江大介（横浜国立大学） J.S. ミルの宗教思想とアジア

*2009年1月10日（土）特別研究会（横浜ランドマークタワー・サテライト）： David Weinstein (Wake Forest University) Utilitarianism and New Liberalism

*2009年9月3日（木）－4日（金） *On Liberty* Yokohama Workshop 「ミル『自由論』はどこまで普遍的か：政治思想、倫理、そして異文化」：山本圭一郎（京都大学）・ Avital SYMHONY（米国アリゾナ州立大学）・ Geoffrey SCARE（英国ダラム大学）・李曉東 Xiao-Dong LI（島根県立大学）・有江大介（横浜国立大学）・徐炳勳 Byung-Hoon SUH（韓国・崇実大学）

*2009年9月15日（火）国立シンガポール大学文学部哲学科スタッフ・セミナー招待報告：有江大介（横浜国立大学） *The Influence of On Liberty on Japan's Political Thought in the Earliest Stage of Modernization*

*2009年11月9日（月）ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン、ベンサム・プロジェクト第5回 Bentham Study Group 報告：有江大介（横浜国立大学） *Lost in Translation: How Japan's Intellectuals Accepted Bentham and J.S.Mill*

*2010年8月28日（土） International Workshop on Western Liberalism and East Asia: Past and Present , Soongsil University (Korea), Prof. Biwhan Kim (Sungkyunkwan Univ.) *Understanding Freedom in Historical*

Contexts : Prof. Joosung Kim (Korean National University of Education) *Individual and Human Being* ・ Prof. Masatake Okubo (Sugino Fashion College) *Confucianism and the Constitution: Recent Amendment of the Fundamentals of Education Act in Japan*

(3) 以上を内容的に総括すれば、第一に、19世紀ヴィクトリア時代において確かに功利主義は J.S. ミルによって代表され、社会改良の指針として機能した。しかし、その時代思潮の中での意義と役割については、我が国ではこれまで必ずしも正確に理解されてきたとは言い難いことが判明した。第二に、具体的には、社会改良の必要性の中で、英国国教会、福音主義、ユニテリアン、ロマン主義といった同時代の有力な思潮との相互関係においてミルや功利主義の再評価が必要であるということである。それは、ロールズ、センによる現代功利主義批判の再考や、東アジア近代化に一定の思想的役割を果たしたミルと功利主義の受容の問題とその評価の検討に、我が国では忘れられていた新たな視点を付け加えることになる点を指摘しておきたい。第三に、以上をもとに、本課題研究に関わった研究者による共同論文集『J.S. ミル

とヴィクトリア時代の思想』(仮題)と、研究代表者・泉谷による我が国の当該時代思想研究の空白を埋める『J.S.ミルとロマン主義』(仮題)の刊行を準備していることを付記しておく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 泉谷周三郎、書評：川添美央子『ホップズ 人為と自然』(創文社、2010年)、ピューリタニズム研究、5号、2011年、6-12頁、無
- ② 有江大介、書評：塩野谷祐一『経済哲学原理』(東京大学出版会、2009年)、経済学史研究、52巻5号、149-150頁、2011年、無
- ③ 有江大介、‘sympathy’は「公共性」を導けるか—効用・共感・公共性—、哲学雑誌、125号、2010年、1-16頁、無
- ④ 泉谷周三郎、書評：行安茂『近代日本の思想家とイギリス理想主義』(北樹出版、2007年)、イギリス哲学研究、33号、2010年、135-137頁、無
- ⑤ 有江大介、Lost in Translation? : Hoe Japan's Intellectuals Translated *On Liberty* (1859) and Utilitarian Writings in the Meiji Era and After、横浜国際社会科学研究、14巻6号、2010年、1-17頁、無
- ⑥ 泉谷周三郎、書評：大塚桂『日本の政治』(勁草書房、2009年)、イギリス理想主義研究年報、5号、2009年、29-30頁、無
- ⑦ 有江大介、書評：音無通宏『功利主義と社会改革の諸思想』(中央大学出版部、2007年)、経済学史研究、50巻1号、2008年、113-114頁、無

[学会発表] (計5件)

- ① 泉谷周三郎、ピューリタニズムとデモクラシー：コールリッジとベンサムとカーライル、日本ピューリタニズム学会研究大会、2010年6月19日、聖学院大学
- ② 有江大介、共通論題「経済学史の形成」への批判的論評：“人文的”経済学史研究はどこまで有効か?、日本経済学史学会第74回全国大会、2010年5月23日、富山大学
- ③ 有江大介、J.S.ミルのキリスト教観、日本ピューリタニズム学会9月研究会、2009年9月26日、聖学院大学
- ④ 泉谷周三郎、イギリス・ロマン主義とJ.S.

ミル、ミル研究会、2009年6月13日、慶應義塾大学

- ⑤ Daisuke ARIE, Mill's Religion of Humanity and East Asian moral systems, International Society for Utilitarian Studies, 2008.9.11, University of California, Berkeley, USA

[図書] (計3件)

- ① 泉谷周三郎 (共著)、木鐸社、地域文化と人間 [増補版]、2011年、210頁
- ② 泉谷周三郎 (共著)、三和書籍、G.E. ムア『倫理学原理』(第3章・第5章)、2010年、141-208頁、300-340頁
- ③ 泉谷周三郎 (共著)、未来社、思想学と現在と未来、2009年、199-216頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

泉谷 周三郎 (IZUMIYA SHUSABURO)
横浜国立大学・教育人間科学部・名誉教授
研究者番号：60015394

(2) 研究分担者

有江 大介 (ARIE DAISUKE)
横浜国立大学・大学院国際社会科学研究科・教授
研究者番号：40175980